

(日置郡金峰町大野諏訪前)

位置と環境

諏訪前遺跡は金峰町に所在し、吹上町と町境を接する台地上の標高約45mに位置する。北側には古里・建石ヶ原遺跡が所在する。

調査の経緯

調査は、平成10・11年度に畑地で削平される部分および農業大学の研修棟建設予定地について本調査を実施した。

遺構と遺物

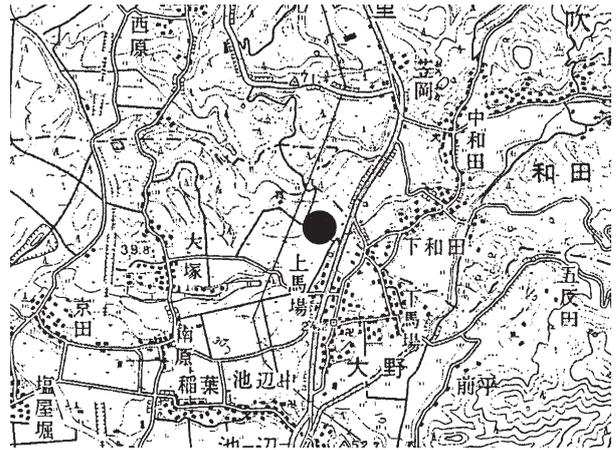
縄文時代早期から縄文時代晩期にかけての遺構・遺物が数多く出土した。

縄文時代早期は、遺跡の西側を中心に土器（押型文・前平式・吉田式・石坂式・型式不明の円筒形条痕文）や石器（石槍・石鏃・チップ・フレイク等）が多量に出土した。

縄文時代晩期は、柱穴4～6個が列に並んで検出される遺構（柱穴列と仮称する）を多く検出した。本遺跡は、周辺での出土遺物の状況や竪穴住居跡の検出がない事から生活遺構としてとらえ、同遺構は柱穴の深さからしても居住のための建物としての用途が考えられる。また、主軸の方位の違いから数群に分類することが可能である。そのほかに、1間×1間の掘立柱建物跡、土坑、焚火跡、埋設土器などの発見がある。特に、埋設土器は一部を打ち欠いた深鉢土器を埋設したもので、小児用の墓ではないかと考えられる。

遺物は、入佐式土器や管玉・勾玉・丸玉のほか、農耕具として使用したと思われる扁平石器も出土した。弥生時代から古墳時代初頭にかけての時期と思われる竪穴住居跡3軒が検出された。1号住居跡からはヘラ状工具による線刻画のある壺型土器が出土した。この線刻画は、大阪府池上遺跡・船橋遺跡で出土した絵画土器に類似し、図柄は中国から伝えられた空想上の動物「龍」の絵を参考にしていると考えられる。

遺跡東側で検出された道跡は、古代から中世のものと考えられ、東西方向と南北方向に延びており、



第1図 諏訪前遺跡の位置

硬化面も見られる。また、北側部分は建石ヶ原遺跡につながっている。また、道跡と平行して溝状遺構が検出された。幅は約60cm、深さ約20cmで断面形はほぼ「V」字型を呈している。諏訪前・建石ヶ原遺跡ともに溝状遺構は東西方向、南北方向へ延びていくのは確実である。

(松下建生)



写真1 弥生～古墳時代初頭の竪穴住居跡検出状況



写真2 弥生～古墳時代初頭の線刻画のある壺型土器